

# 2017年8月26日(土) メディカルはこだて第63号 掲載

## 『ドクタークローズアップ』

内科 清水 平 科長

# DOCTOR

## closeup

函館中央病院内科科長

# 清水 平 氏



しみず ひとし  
平成9年東京大学法医学部卒業

平成17年北海道大学医学部卒業。同年在沖縄米国海軍病院勤務。平成18年手稲・新仁会病院、平成24年老蘇会静明館診療所、平成26年静仁会静内病院を経て、平成29年函館中央病院内科科長へ就任、現在に至る。

日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医  
日本病院総合診療医学会認定医

### 東大在学中、外交官の夢を変え、医者になることを決断 総合診療医として地域医療への貢献を目指す

今年4月函館中央病院の内科科長に就任したのが日高管内平取町出身の清水平医師だ。小学2年のとき、小学校教師の父親はアラブ首長国連邦の日本人学校に勤務。清水医師も3年間ドバイで暮らした。

ためには外務省へ入省し、外交官となることを考えました」。外務省は圧倒的に東大法学部卒が多い。清水医師も夢を実現させるために東大法学部へ進学した。

問題。そして外務省の先輩から聞いた外交官の話に比べて『へき地医療』の方が自分の性分に合っていると感じたからです」。

夢は大きく変化する。「外交官ではなく医者になることを決断しました。その理由は母方の祖父が在宅で寝たきりになつたことや、小学生のときに急性肺炎で苦小牧の病院に入院した際に感じた『へき地医療』の

プログラムは日本の医学部

を卒業した日本人医師に米国式の医学教育や医療を経験する絶好の機会を提供していることが有名で、このプログラムを経て米国へ医学留学を果たした日本人は多い。「家庭医療のローテーションからスタートしますが、患者のカルテ・ファイルを渡されてすぐに診察。その結果を指導医の前でプレゼンしますが、非常に細かい部分までチェックされます。3カ月で診療の英語はそこそこ自信がつきます。3カ月で診療の英語はそこそこ自信がつきましたが、夕方の4時頃には精神的にも肉体的にもクタクタの毎日でした」。

で学んだ清水医師は、手稲・新仁会病院(札幌市)で家庭医療の経験を積み重ね、老蘇会静明館診療所(札幌市)では在宅での終末期医療を提供。地域の急性期・救急医療の基幹病院である静仁会静内病院(日高郡新ひだか町)では急性期医療を中心に地域に貢献した。地域医療を考えたとき、函館中央病院のような急性期病院にこそ総合診療科の必要性が高いと清水医師は言う。「専門医の数が多い病院の隙間も埋められるのが総合診療医です。診断のついていない症候例など、特定の診療科に当てはまるないケースなどは中継地點となつて専門医につなぐのが総合診療医の役割です」。

4月の就任以降、不明熱などの患者が送られてくることも多くなつた。「総合診療科の看板を掲げるには医師も足りませんし、看護師の教育や院内の体制整備も必要です。総合診療医としては院外の人脈も作つていいことが必要で、病院の中だけではなく地域に還元できる医療を目指していきます」。